



▲「第二の長堀」的な景観を見せる大甲橋上手左岸（新屋敷側）に姿を現した石垣造りの親水護岸

# 「治水」と「親水」両立目指す

九州北部豪雨被害を受けて国土交通省では、平成15年度から龍神橋く八城橋間の「緊急対策特定区間」で実施中の河川整備に加え、24年度から「河川激甚災害対策特別緊急事業」で集中的な整備を開始。総事業費約350億円を投じ、28年度までを目処に流下能力を毎秒2000mに引き上げる。

一方、川幅が狭く、ボトルネック部では流下能力が毎秒約900mと出水時には危険な所。学識者や地域住民の意見を取り入れ検討した結果、大甲橋上流左岸（新屋敷側）では、延長約600m、高さ約9mの石垣が姿を現した。川幅を拡幅し、流下能力毎秒2000m以上を確保する一方、川べりの樹木約150本を移植し景観にも配慮。石垣護岸上と下に遊歩道を設け、広々とした親水空間を創出した。熊本城の長堀にも似た景観だが、長さは優に2倍以上上だ。

大甲橋上流左岸だけでなく熊本駅前の白川橋から立田山南麓の小磯橋間では、新河川法による国の整備で白川の親水性が高まりつつある。また、熊本市では白川沿いの市道や国の河川管理道路を活用して、自転車やスモーズに移動できる「白川自転車ハイウェイ（仮称）構想も検討中だ。橋梁部分のスモーズな通過に課題を抱えるが、「白川ハイウェイ」の実現は、通勤・通学や買物などでの自転車活用に大いに期待される。

コンクリート護岸で固められ市民の視界外にあった感の白川だが、宝は足下に眠っている。

## 大甲橋上手左岸に「第二の長堀」

熊本市を流れる白川がその姿を大きく変えつつある。そのポイントは「治水」と「親水・景観」だ。阿蘇に大きな被害をもたらした昨年7月12日の九州北部豪雨は、熊本市でも白川の湾曲部に造成された北区龍田、龍田陣内の住宅地を濁流が呑み込み、渡鹿、黒髪、井川淵町ほかで浸水。市中心部でも堤防が未整備だった大甲橋く代継橋間の右岸で、土のうを積み上げ間一髪で中心街への氾濫を防いだ。「6・26白川大水害」（昭和28年）の記憶を脳裏に蘇らせた市民も少なからずいたに違いない。姿を変える白川をカメラで追った。（写真は5月末に撮影したもの）



▲親水護岸は延長約600m。石垣の上と下に遊歩道が整備される。地域住民の意見で樹木は護岸上に移植された



▲子飼橋下手右岸（東子飼町、井川淵町）でも石垣護岸の整備が進んでいる



▲明午橋から上流の工事を望む（正面は子飼橋）。白川の形状で護岸の形も変わるが、自然石が使われ景観に統一感がある



▲熊本市が架け替え工事中の子飼橋。新子飼橋は4車線化される。下手の明午橋も川幅拡幅で25年度から架け替え工事に入る